

作家 高樹のぶ子  
たかぎ



©富本真之

小野小町の生涯を書き終えたものの、私の心は、  
いまだ九世紀の平安京を彷徨っている。小町が暮ら  
した内裏の辺りや、雨乞いの歌で小町が都の寵児と  
なる舞台となった神泉苑の湖上を浮遊しながら、小  
町をめぐる人々にほほ笑みかけると、いずれの男女  
もまた、美しい貌で私にうなずいてくれる。

私は千百年昔の京の都に、立っているらしい。  
ゆるりと見渡せば、広い朱雀大路を行き交う牛車  
や、牛飼いの童たちの「おっし、おっし」の牛追い声。  
ぬかるむ道の足場を、裾を気にしながら歩く市女笠  
の女たちは、羅城門近くの東寺に向かうのだろう。  
東寺の近くで、八講など行われるのかもしれない。  
壺装束で馬に乗る男は、都に戻ったばかりの様

空に浮かぶ月と雲を見上げては、眠れぬ日々を過  
しているのだろう。

ああ、その恋のすべてが、この都の土に染みこん  
でいるのだ。

「高樹さん！」

「あ、はい」

とろりと甘い、平安の夢から覚めた。

「お疲れですか？ もうすぐ遍昭の墓に着きますよ」

「え、本当に遍昭のお墓があるのですか？」

「ちよっと迷ってしまいました、あります、宮内  
庁が管理しているようです」

車は遍昭のお墓を探して、花山稲荷や北花山界隈  
を右往左往していたらしい。

案内の人はかなりの京都通で、この街のあらゆる  
場所には、千年を超す歴史の時間が幾層も重なり、  
積み上げて眺めれば、空に届くばかりに高く伸びて

子。馬の轡をとる馬副も興奮気味。切袴にわらじ  
姿で、朱雀大路の賑やかさに心を奪われ、落ち着き  
なく目を泳がせている。

ああ、ここは仁明帝の都。

仁明帝はまだ存命、ということはある宗貞もまだ  
出家などしておらず、やがて世を捨て僧正遍昭とな  
る身も、男としての懊悩の中で、小野小町との切な  
い恋に心をかき乱されているに違いない。

帝の思い女である小町は、帝に隠れてその身を宗  
貞に献げた。名を名乗り合うことも出来ないまま、  
二人は月と雲の名のもとに、命を尽くして結ばれた  
のだ。これを生涯一度かぎりの逢瀬として。

二人は肌に纏わり付く記憶を振り払うように、夜

いることを知っている。

街角や路地に降り積もるこの千年の記憶を吹き払  
い、僧正遍昭の墓に辿り着かなくてはならないが、  
なんとまあ、昔からある大石道の左右は、家々や集  
合住宅が建て混んでいて、こんなところに遍昭が眠  
っているとはとても思えないのだ。

ともかく、案内の人を信じて路地を入っていつて  
みると、あった。お椀を伏せたような小山がそこに  
現れた。

家々に囲まれた狭い土地に、さらに垣で囲い込ま  
れた小山は、墓石が置かれる時代より前の、まさに  
当時の墓だ。宮内庁の石碑には「桓武天皇皇孫 遍  
昭僧正御墓」と記されている。間違いない、あの御  
方がここに眠っているのだ。

小山の頂点に、一本だけ木が伸びていた。風が木  
の葉を揺らして通り抜ける。

天つ風 雲の通り路ふき閉じよ

乙女の姿 しばし留めん

後に百人一首に採られた遍昭の歌は、五節舞姫に  
加わる小町を詠んだもの、としたけれど、これで良  
かったのでしょうか。小町との秘めた恋を今の世に  
晒したこの作者を、遍昭様、どうぞお許しください。  
空を行く風に手を合わせて、しばし瞑目。



(注)法華経8巻を毎朝、毎夕、4日間にわたり講じる法会「法華八講」  
の略。9世紀から10世紀にかけては、主に周忌追善供養として行  
われた

時の調べ  
Essay

略歴

1946年山口県生まれ。19  
80年「その細き道」で作家デ  
ビュー。1984年「光抱く友  
よ」で芥川賞、1994年「蕪  
燃」で島清恋愛文学賞、199  
5年「水脈」で女流文学賞、1  
999年「透光の樹」で谷崎潤  
一郎賞、2006年「HOKK  
AI」で芸術選奨文部科学大臣  
賞、2010年「トモス」で  
川端康成文学賞。芥川賞をはじ  
め多くの文学賞の選考に携わる。  
2009年、紫綬褒章受章。2  
017年、日本芸術院会員。2  
018年、文化功労者。著作は  
多数。近著「小説伊勢物語業  
平」（日本経済新聞出版）で泉鏡  
花文学賞と毎日芸術賞を受賞。

【小説小野小町 百夜】

日本経済新聞出版  
四六判 384ページ

[https://bookplus.nikkei.com/  
atcl/catalog/23/04/11/00768/](https://bookplus.nikkei.com/atcl/catalog/23/04/11/00768/)